

I 地形・歴史 Topography & History

1 地形等

市内 13 地区のうち最も面積が小さく、東部を平の市街地と接している。

北西に関伽井嶽を背負い、中央を夏井川支流の好間川が東流、東端の川中子で夏井川と合流する。ほぼ丘陵地で、好間川流域にはやや広い平坦地もあり、住宅地・農用地となっている。また地区の西部には、水石山の一部および好間川溪谷などの豊かな自然資源が存在する。

かつて、炭鉱のまちとして栄えた所であるが、昭和 55 年内陸型工業の集積を図るため地域振興整備公団により「いわき好間中核工業団地」(324.1ha)が開発着手され、工業系の土地利用が図られている。

2 歴史

古くは好嶋荘といわれたところから、古名にちなんで好間と名付けられた。

石器が多量に出土した愛谷遺跡は、縄文時代中期(BC3000 年)から室町時代にかけての複合遺跡であり、古代からこの地に人々が住んでいたことが証明される。

文明 15 年(1484)国人領主岩城氏は、大館に「飯野平城」を築き、拠点を白土城から移して本城とし、慶長 7 年(1602)岩城領 12 万石が没収されるまで続いた。その支配区域は、現在の双葉郡から茨城県北茨城市までに及んだと伝えられる。

慶応元年(1865)ころ石炭採掘が行われたが中止し、明治に入って明治 37 年(1904)白井遠平が好間炭硯を設立し、北好間から平駅まで軽便鉄道を敷設して石炭の搬出をはじめた。明治 41 年には、好間～綴駅(現内郷駅)間に石炭専用線が敷設され、出炭量も増加した。

好間炭硯は大正 4 年(1915)古河鉱業(株)に譲渡され古河資本の炭鉱として昭和 44 年(昭和 39～44 年は系列会社の好間炭硯)の閉山まで続いた。

第 2 次大戦後の石炭産業の最盛期(昭和 25～6 年)には人口 2 万 3 千余人に達し、人口では日本一の村といわれた。この時期炭鉱従業者は、2 千人以上を数え「常磐炭田」の主要産炭地として活況を呈したが、エネルギーの主体が石炭から石油へ転換したため急激に衰退し、炭鉱のすべてが姿を消した。

(参考文献:「いわき市史」、「新しいいわきの歴史」)

※行政区域の変遷

